
時逆（ときさか）の皇女

鳥居 瑛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時逆ときさかの皇女

【Nコード】

N7270D

【作者名】

鳥居 瑛

【あらすじ】

エンディミア国の皇女であるエルシリアはもうすぐ18歳。だが、生まれてから2年前までの記憶が全くなく、王城ではなく王家所有のエンディミアの森館にすんでいる。館には少年がいて、彼がいつもエルシーを守るかのように彼女のすぐそばにいるが、エルシー以外の人間には、彼の姿は見えない。エルシーの記憶がないのはなぜなのか、そして少年は一体何物なのか？

始まりの夜と昼

まるで、自分の周りでは時間が止まっているみたいだと、エルシーはいつも思う。記憶も、一体どこに置き去りにしてしまったのだろう？

エルシーには、生まれてから2年前までの記憶が、全くない。もうすぐ18歳の誕生日を迎える。だが、彼女の記憶が始まるのは16歳からだった。

月の明るい静かな寝室、冷たいベッド。

それが彼女の記憶の始まりだった。それ以前の記憶は、力任せに擦り取られたかのように、かき消えていた。

子供の頃を思い出そうとすると、決まって心のどこかが不自然に引きつったような感覚を覚える。そして、それだけだ。

何かを思い出せたためしは一度もなかった。

父王や母、そして皇太子である兄・リミエリオンは優しくエルシーを気遣ってくれるし、頻繁に訪問してくれる。

けれど皇女であるエルシーがなぜ、王城ではなく、このエンディミアの森館に住まわなくてはならないのかは、何度聞いても決して教えてくれない。

だが、教えてくれなくても、エルシーにはなんとなく分かっていた。

たぶん自分は他の人と比べて、どこかおかしいのだろうと。だって、「彼」が見えるのだから。

彼女の最初の記憶、ベッドの中で目覚めた瞬間から、「彼」は彼女の視界の中にいた。エルシーの記憶の始まりは「彼」だったと言ってもいい。

目を開けた瞬間、漆黒の髪に褐色の肌をした10歳くらいの少年が黒曜石のような瞳を細め、自分を覗き込んでいるのが見えた。

驚くように身を乗り出してきた少年とまともに目があって、しばらく靄のかかった思考のまま、エルシーは彼を見つめていた。

その瞳を、きれいだなと思ったのを覚えている。夜より深く黒い瞳の中で、まるで月光を弾く水面のように銀色の光が踊っていた。

エルシーがベッドから体を起こそうとすると、少年は心配そうに片腕を伸ばして支えようとする素振りをみせた。その気遣わしげな様子に、心の奥のほうで何かが動いた気がした。

だが何か言葉を発しようとする前に、襲ってきた睡魔に意識を絡め取られ、エルシーはゆっくりと瞼を閉じてしまった。

次に瞼を開けた時、視界に飛び込んできたのは兄であるリミエリオンだった。エルシーが瞼を開くのを待って、リミエリオンが言った。

「……エルシリア？」

「兄さん？」

「……！よかった、目が覚めたんだな、エルシー！」

エルシー、と名を呼ばれて、それが自分の名前だということも、その名を嬉しそうに呼んだ明るい金色の髪と瞳の青年が自分の兄だということも、すぐに分かった。

……それなのに。

視界の端、部屋の隅にうずくまって、自分をじっと見つめている少年が一体誰なのか、やっぱり思い出すことはできなかった。

始まりの夜と昼 2

「エルシリア？」

リミエリオンが、エルシーの視線の先を追いかけないように振り返り、少年が座っている辺りを見た。

少年は一瞬体を緊張させたようだったが、黙ったままりミエリオンのほうに視線を遣った。

だが兄は、エルシーの視線の先に何があったのか、判断しかねるように辺りを見渡して、それから少し首をかしげて、エルシーに向き直った。

「何を、見ていた？」

リミエリオンが、眉間にわずかに皺を寄せ、いぶかるように聞いた。

見えていない。

とつさにそう悟った。

兄には、自分にはつきりと見えている不思議な少年が、見えていないのだ。

一方の少年は、リミエリオンとエルシーの反応の両方を、かわるがわる見ている。

少年の瞳には、狼狽も動揺もなかった。風のない夜の湖のような静けさで、落ち着き払っている。

まるで自分より二つ上の兄より年上に思えるほどだった。

「……………なんでもないの、兄上。ごめんなさい。ちょっとぼうつとしてしまっただけよ」

心配そうに自分を覗き込む兄に、エルシーはかるうじて微笑し、答えた。

「そうか。……そうだよな。何しろ10日以上、眠っていたんだから。ロディス先生でさえ、あきらめかけていたくらいだ。……あ、そうだ！こうしちゃられない。父上や母上に知らせなくちゃ。二人とも驚くよ！待ってて、今すぐ王室に報せの使いを出してくるから」

リミエリオンは、満面の笑みで傍らの椅子にかけていたマントを羽織ると、軽く手を上げてエルシーに会釈をしてから、部屋を飛び出していった。

ぱたぱたというせわしげな足音が遠ざかると、部屋にあるのは沈黙とエルシー、そして少年だけになった。

リミエリオンが立ち去るとほぼ同時に、少年は立ち上がっていた。

エルシーは改めてまじまじと少年を見つめた。少年も、まっすぐにエルシーを見つめ返す。不思議と、恐怖はなかった。

黒馬のたてがみのように漆黒の柔らかそうな髪、そして夜のよう静かな瞳。秋の森でたわわに実るグリノートの実のような褐色の肌は、明らかに異国の民であることを物語っていた。

簡素な白布の着衣に包まれた体からは、すらりと細い手足が伸びている。腰の辺りは青く染められた紐で無造作に結ばれていて、それが唯一、少年が身に着けている色彩と違ってよかった。

やはり、どうみても10歳程度にしか見えないと、エルシーは思った。

だがその瞳は、10歳の少年にしては静かすぎ、そしてどこか寂しげに見えた。

始まりの夜と昼 3

エンディミアの森館に、エルシーは一人で住んでいた。

もちろん、侍女は何人かいた。だが常にエルシーのそばに侍っているというわけではなく、毎朝やってきてエルシーの身の回りの世話をし、夕方にはみな帰っていく。

父王や母后はそう頻繁にはいかなかったが、兄は時間を見つけてはちよくちよく顔を出し、季節の果物や菓子、美しい布地などを差し入れてくれた。

父も母も兄も、みな自分の顔を見るたびに心配そうに覗き込み、体の具合はよいか、何か不足はないか、と細かく心を砕いてくれる。その表情や仕草は、決して偽りのものではなく、本心から自分を心配してくれているものだった。

だから、なおさら言えなかった。

今、私たちがいるこの部屋に一人、見知らぬ異国の少年がいるのです。

ほら、あそこ。あの子は一体、誰なのかしら………などは。

この館を住まいとして寝起きをしているのは、エルシーただ一人。月が現れる頃には、エルシーは森閑と静まり返った館にたたずむことになる。ただし、一人ではない。振り返ればすぐそこに、少年はいた。

冷静に考えると、恐ろしいことに違いなかった。

自分以外の誰にも見えない、得体のしれない異国の風貌の少年と二人、人里はなれた館に閉じ込められているのだから。

だが不思議なことに、物言わぬ少年と二人きりになっても、恐怖を感じたことは一度もなかった。

鳥の鳴き声や大鹿が遠くで啼く声以外、音らしい音もない寝室のバルコニーでエルシーは銀月を仰ぎ見ながら考えていた。

（一体いつまで、何かから隠れるような、こんな暮らしが続くのかしら？）

この二年、何度も自問し、そして答えの出たことがない問いだった。

父に問えば、黙って眉間に深い皺を刻む。母に問えば、悲しそうに視線を落とす。兄は、何か言おうとしたことが何度かあったけれど、いつも喉の奥に何かを飲み込み、口をつぐむのだ。

他の人には見えぬものが見えるから自分はここに閉じ込められているのか、それとも閉じ込められているから、孤独に耐え切れぬ心が幻を生んだのか？どちらなのかすら、分からなかった。

だが、一日のゆうに半分、口を閉ざして沈黙の中で生きているというのに、孤独を感じることはなかった。

視界の中のどこかに、必ずあの少年がいたからだ。不思議なことに初めて会ったあの日から、二年経った今も、少年は一言も言葉を発することがなかった。名を聞いてもわずかに口をへんの字に曲げて肩をすくめるだけ。何かしゃべって、と頼んでも同じ反応を返す。

それなのに、まるでエルシーを守るかのように、必ず彼女の視界のどこかに、彼はいるのだった。

少年は、彼女以外の人間の目には見えていないようだった。どんなに彼の近くに兄や侍女がいても、決して誰も彼のほうを見向きもしなければ視線を遣りもしないことから、それは明白だった。

バルコニーで月を見上げていたエルシーは不意に冷たい夜風に頬をなでられて、小さなくしゃみをした。

「……………もう冬が来るのね」

口の中で呟いて、部屋のほうを向き直る。バルコニーからほんの10数歩離れた先にあるベッド脇に、少年は片足を抱いて座り込んでいた。月の光を得てわずかに銀色に輝く視線が、まっすぐに自分を射抜いている。

慣れとは、怖いものだ。ほとんど凝視に近い視線に、エルシーはすっかり慣れていた。

手招きしなければ、自分から寄ってくることも決まてない。声をかければ、すぐにエルシーのもとへやってくるが、それだけだ。

何をするわけでもない。少年は黙って、初めて会ったときから変わらぬ静かな眼で、自分を見上げるだけなのだ。

昏(くら)い夜明け

「雲行きが怪しくなってきたよ」

数日振りに訪れたリミエリオンが、侍女に毛皮の上衣を手渡しなから言った。

「あら、そうかしら？今日は良いお天気だと思ったのだけれど」
エルシーが窓の外を仰ぎながら答えた。

「ああ、違う違う。天気のことじゃない。イルレゾ国が軍備を強化しているという情報が流れてきたんだ」

イルレゾはエンディミアの東にある国だ。建国の祖はエンディミアの祖の兄に当たる。したがってエンディミアとは、古くからの友好国だった。両国民とも、白晶石のような白肌と、金髪に切れ長の細い眼と面長の顔立ちが共通しており、言葉を話さなければどちらの国民か判断しかねるほどによく似た外貌を持っていた。

「あら、兄上。まさかイルレゾが攻めてくるとお考えなの？」

「・・・・・・・・いや、それはないだろう、とは思う。わが国とイルレゾは古くからの友好国だ。イルレゾにとって、エンディミアは幼弟のようなもの。この小国を攻めたとして、得るものは少ないし、武力強化にもなるまい」

「では、何を恐れておいでなの？」

「・・・・・・・・分からぬ。分からぬから、怖い。何をしようとしているのか全く見当がつかないのに、武力増強に妙に力を入れていくようなのだ。・・・・・・・・一体、何をするつもりなのか・・・・・・・・」

わずかに眉間に皺を寄せながら、リミエリオンは呟いた。そういう思案げな表情をすると、兄は父とよく似た顔になる、とエルシーは思った。

「兄上、そんなに心配なさらなくても、イルレゾがエンディミアを攻める理由が見当たらないのであれば、使者を出してお伺いして

みたらよろしいのに」

「攻める、理由か……」

リミエリオンはほとんど独り言のように呟き、少しためらってから言った。

「何事もないことを信じたいが、もしも、万が一そのようなことがあつたら、……この館など、ひとたまりもないな」

「兄上つたら。悪いほうへ考え出すと止まらなくなるのは相変わらずですね。この館を攻めたところで、益になるようなものは何もなくてよ。気のふれた皇女がいるだけですもの。……それに、」

エルシーはわざとおどけて言う。そんな物言いをするのは久しぶりなので、つい、口が滑った。

「それに？」

「それに、この館には小さな騎士さまが住んでいるから、いざとなつたらきつと私を守ってくださいわ。といっても、私にしか見えない方だから、兄上にはご紹介できないのだけれど」

くすくすと笑いながらエルシーは言った。

ほんの冗談のつもりで兄を励ました、つもりだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7270d/>

時逆（ときさか）の皇女

2011年1月16日07時00分発行